

# ニジェール支所便り

## 2019年11月号

【編集長】小畑支所長 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni\_oso\_rep@jica.go.jp

★ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ <https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html>

### 今月のトピック



- 新・支所長のつぶやき ～Honda Goy！～
- ブルキナ事務所長のぼやき ～ワガのウサギとニアメのカメ～
- 久々企画！短期出張者が見たニジェール ～ガイトン HA+内藤真子企画調査員 特別出張版！～
- 10月の支所の活動紹介
- 新コーナー：ニジェール隊員 OV からの便り
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介  
～みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～  
～PASVA：農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介  
～ニジェールでゴミを集める日本人 第 23 話 -食器に対する女性たちの思い入れと人生における意味づけ～
- 巻末連載企画！OD のいちおし

### 新・支所長のつぶやき ～Honda Goy！<sup>1</sup>～

今回の支所便りもたくさんの方に原稿をいただき、ありがとうございました。

ブルキナファソから出張でこられた方々にはニアメ市内の変貌をご覧いただき、うらやましがらせてしまったようで、どうもすみません(笑)。



最近印象深かった国際移住機関(IOM)ニアメ事務所に勤務する保健医療担当の保護官澤屋奈津子さんのお話を少し。

IOMはニジェール全土に6か所のサブオフィスとトランジットセンターを持ち、ニジェールをはじめ、ギニア、カメルーン、セネガル、チャド、スーダン、ナイジェリア人など、国境を跨ぐ移民・国内移民の調査モニタリングや救援活動などを行っています。

アルジェリアとの国境のアサマカには毎週 700 人の移民がアルジェリアから送還されてきており、200km 内陸のアルリットさらにその 250km 先のアガデスのセンターまでトラック移送の手配をしつつ、ケガ人や感染症、出産などの緊急対応に忙殺されることもあるとのこと。2019 年には大きくこのような移民の数が増えています(約 49 万人)。移民への支援は逆に地元民の反感を買うこともあり、デリケートな仕事です。



ニジェールの地方の病院には修理できずに放置されているトヨタの救急車が博物館状態となっていて、トヨタの国から来た人間として何とかできないかいつも思うそうです。

緊張が強られる終わりの見えない大変な仕事ですが、澆刺とお話する澤屋さんの姿にこちらも勇気づけられました。支所便りへの原稿をお願いしましたのでご期待ください。

<sup>1</sup> Honda Goy (ホンダ・ゴイ)とは、ニジェールの現地語(ザルマ語)で、「よくやりました!」または、「お疲れ様でした」の意。

最後に、在東京ニジェール共和国名誉領事館が今年12月末をもって閉館することになりました。ニジェールへの渡航ビザは、今後、経由地のニジェール大使館での取り扱いとなる由です。日本人にとってニジェールがさらに遠い存在になってしまうようで残念ですが、これまで長きにわたりご尽力いただいた名誉領事の河野さん、事務局長の久保さんに心から感謝いたします。ありがとうございました。

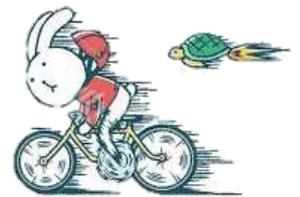
## ブルキナ事務所長のぼやき ～ワガのウサギとニアメのカメ～

今回2年ぶりのニアメ出張となったブルキナファソ事務所小林所長に大いにぼやいてもらいました！

私が初めてニアメを訪れたのは1996年11月、ちょうど今から23年前です。JICAでの初めての出張先がブルキナファソとニジェールでした。もちろん当時の私は、その後の人生の中で私自身がよもやブルキナファソやニジェールにこんなに深くかかわることになるとは微塵も思っていなかったわけですが、この地に帰ってきたいという思いが知らぬ間に私の頭の奥深くに埋め込まれ、時を経てそのスイッチが点火されたのかもしれない。

今となっては当時のニアメの記憶は朧気ですが、飛行機から見た赤茶けた大地と砂漠のバラという名のフランス料理屋で見たニジェールの風景を撮影したスライドショーのことは強く印象に残っています。あれから23年、今回訪れたニアメの街は驚くべき変容を遂げていました。

今年7月のAU総会を機にニアメの街に新しくホテルや国際空港が建設されたということは、私の耳にも入ってきていました。しかしながら、ニジェールで勤務するJICA関係者のオアシスであったワガドゥグが、今回の開発を機にニアメに一気に抜き去られてしまった、という話についてはそんなことはあろう筈もない、と童話に出てくるウサギのように余裕を決め込み全く信じていませんでした。



ところがです。ニアメの空港に降り立つや否や、私はそのスタイリッシュな空港建物のデザインに圧倒されてしまいます。高い天井、ゆとりのある入国審査デスク、恐竜の化石を博物館風に展示した立派なオブジェ、そして極めつけはスターバックスを彷彿とさせるお洒落カフェ！どこをとってもインスタ耐性高し！！……………そう、いつの間にかワガドゥグウサギはニアメカメに追い抜かれていたのです。

あまり詳しいことは分かりませんが、ニアメに追い抜かれてしまった今、ワガドゥグの空港は世界で最も質素な国際空港と化してしまっただけではないでしょうか。私は昔のニアメの空港のことをちょっと大きめのバス停のようだ、などと軽口をたたいていたのですが、今となってはワガドゥグの空港こそが田舎のバス停に思えます。ニアメよ、すまなかった、そしてがんばろうワガドゥグ。<了>



【空港で出迎える恐竜の化石】



【もふもふに覆われたバイク。都会ならではのセンスである】

こんにちは。ニジェールを人知れずお騒がせしている JICA ブルキナファソのガイトンさやか健康管理員と内藤真子（安全管理）コンビです。知る人ぞ知るニアメマニアの二人、兼轄訪問をいいことにすでに今回5回目の訪問になりました。

これまではわれらが愛すべきブルキナファソとニジェール、どちらが目くそで鼻くそかを競い合っていた関係性。カタカナだとニジェールが上だけドアルファベットではブルキナが上だというほどのレベルで競り合っていました。この度首都ニアメでのアフリカ首脳会議に合わせた空港の新設、ホテルの建設ラッシュ、われらが西アフリカ民あこがれのホテルラディソンブルー（別名ニジェール川の黒船）の到来により、目くそブルキナファソは置いてきぼり。ミゼラブル。棚ぼたニジェールは膝のかさぶたくらいに大出世を遂げたという、もう信じられない事実。新空港詳細は以前の支所だよりを見ていただければわかるのですが、小さいけどまるで先進国みたいな空港（なによりも空港で使ってるフォントが欧州）、さだ●さしみみたいなおじさまの絵の看板がまたうっかり緑で「スタ●！」とガイトンさんが叫んでしまったおしゃれカフェまでできて、恐竜の骨とかなんでまたこの国にと思わざるを得ない選択だけどもあまあいけて、無料さくさく Wi-Fi まであって、飛行機から外出ないで空港行っちゃって、エスカレーターなんか作っちゃって・・・電気あんまりないじゃないのこの国。追い打ちをかけるかのように、この国にもう援助はいらぬのではないかと思わざるを得ないラディソンブルーの最上階ラウンジ。入口の自由の女神は薄っぺらで風で倒れてしまうけど、リアルアメリカも集まるアメリカンレストランとか、高いお金出しても買いたいカバンがあるお土産屋さんとか、ブルキナトップのホテルたちと比べてもあまりにも差をつけられた感じが、もう、「ずるい」としか表現できませんでした。1年半大事に手をかけて育ててきたニジェール（支所とその一味）に見事に裏切られた感。通貨も言葉も景色も変わらない、飛行機で45分のまるで国内出張のようだったのに、さんざんラディソンのレストランを堪能してしまったあとは、ブルキナの空港に降りるのは夢が覚めた状態。ずるい！！

とはいえ、今回はむぎむぎと下唇を噛みに来たのではなく、世界のどこかでほくそ笑んでいるであろう中川さんの残像（残毛）をお祓いにきたわけでもなく・・・全支所員対象に救命講習を届けに来たのです。ちなみに念願の新しい国立モルグはまだできてなくてお預けです。

ニジェールもテロや暴動、そして交通事故の多い国です。ホテルがどんなに立派でも（ずるい）、日常にある危機はあまり変わらないでしょう。ブルキナ同様に AED はまずありません。教育が十分に行き届かない中で、どこまでの方がファーストエイドを知っているだろう。運転手はじめ現地スタッフも入れての講習なので、「本当に基礎中の基礎、だけど忘れてはいけない大事なこと」だけを詰め込んで、講習が始まりました。

「ファーストエイド」は医療行為でしょうか。ちがいます。ファーストエイドは救急車や病院で医療行為が始められる前に、それらが到着するまでの生命をつなぐ処置です。つまり、特別な機械なしでだれでもできることが目的です。そうしたことからいわゆる医療者のみが行える医療行為ではないのです。その目の前の人の命を助けること、現状を悪化させないこと、を目的とするファーストエイドはその後の医療行為（機械や薬を使った救命処置）の最初のステップになります。ニジェールと日本、医療のレベルやレスキューの質は確かに同じではありませんが、ファーストエイドの概念は世界中どこに行っても同じです。ファーストエイドがないことには、どんなにいい病院があっても立派な救急車が来



てくても、意味をなさなくなってしまう。そのため、ファーストエイドが救命の鎖の一番最初の輪とされています。

人が倒れている、という場面からフローチャートで追っていきました。反応の有無、呼吸の有無、安楽な体位、そして胸部圧迫と人工呼吸。救急車が来るまで続けてほしい、ニジュールはきっとブルキナと変わらず、30分かかるともまれではない。蘇生処置に限らず、出血や骨折の場合、呼吸はしているけど反応がない、子供の場合、胸部圧迫と人工呼吸による蘇生の効果は1分ごとにどうやって変化していくのか・・・ガイトンさんのフランス語はもうはっちゃけ支離滅裂モードでしたが、相棒真子さんの頼れる合いの手と通訳（最終的にガイトンさんが日本語、真子さんがフランス語という未来な形へ）、そしてなによりも支所員全員の「知りたい」という熱い気持ちに支えられて講習と実技ができました。

蘇生人形は全員分ないから、使ったのはペットボトル。これで全員一斉に練習が可能になりました。ペースをつかむために、フランス語圏でだれでも知ってる童謡に合わせて胸部圧迫。タイトルを言ってさあガイトンさんが歌おうと思ったら、ある男性支所員が率先して歌ってくれました。一回で20秒、2分間練習するために、結果的に何回も繰り返して歌ってもらいました。たったの2分、それでも胸部圧迫を続けた全員がへとへとなりました。実際はこれを30分、もしくはそれ以上続けるのです。助けを呼ぶことの大切さも知ってもらえました。

目の前の人の生命、つまりその人の希望と未来を守るために、今後そうした場面に遭遇したら躊躇せず行ってほしい。救命の鎖をつなぐために。アフリカの事故では、周りに集まるだけ人が集まって、全員で倒れている人を雑誌であおぐ、自分はやらないけどやっている人に口を出す風景が一般的です。次からはそのあおぐ人や口を出す人ではなく、積極的に止血や安楽体位をとれるように。そしてその日がいつ来てもいいように、絶えず練習を続けられるように、願っています。

ニジュール支所のみなさま、今回もお世話になりました。

以下に写真を紹介します。※ブルキナ関係者は閲覧注意！（目に毒です）

ガイトンさやか



左：黒船ラディソン最上階バーではほほ笑む真子さん。サーモン！

右：いくらフラッシュたいも暗い。ガイトンさんの悔しさを反映している。後ろに見えるのはニジュール川。雨季に氾濫して周辺国を洪水にする。

※※ 1 ページ目のおひさまと雲のイメージはブルキナファソ事務所・ニュースター「ブルキナ★ケネバ」のガイトンさんコーナーのものを借用させて頂きました（編集長・加藤さん、無断で転用しちゃいました。スイマセン！）





安楽体位をとる実習。転がる佐々木さんと転がすうひらさんと手がブレてる真子さん。



傷病者を安全な場所に移す方法の実習。・・・と教える真子さんの安来節。



空のペットボトルを使用した、全員一斉での胸部圧迫練習。左写真の薄いピンクのシャツの彼（ハッサンさん）が例の歌手です。おやおやおや、小林所長の腕が曲がっていますね。右はあまりのスピードに残像が残った小畑支所長。撮影したガイトンさんが下手だからではありません。みなさんちゃんと手を組んで、腕が伸びています。

ガイトンさん、真子さん、この度も遠路遥々ニジエールまでお越し頂き、どうもありがとうございました！今回学んだことを忘れないよう、定期的に皆で実践していきたいと思います。またのお越しをお待ちしております！（Y.S）

## 10月の支所の活動紹介

### 【灌漑稲作振興のための農業水利整備公社(ONAHA)機能強化計画 E/N、G/A 署名】

さる10月4日(金)、外務省にて無償資金協力「灌漑稲作振興のための農業水利整備公社(ONAHA)機能強化計画」の交換文書(E/N)署名が、在コートジボアール日本大使館・倉光大使とニジエール外務省次官の間で執り行われ、続いて JICA ニジエール支所・小畑支所長と、同じく外務省次官により贈与契約(G/A)が締結されました。

2015年からこの署名に至るまで、日本とニジエール双方で実に多くの方々が本案件に関わってきました。そのひとりひとりの顔を思い浮かべながら、当日は感慨深い思いに浸っておりました。その場に居合わせた ONAHA のクーレ総裁をはじめとする支援機関や農業省関係者も、きっと同じような思いでこの様子を見守っていたことでしょう。

今後は、いよいよ供与機材の発注・製造・輸送に向けて具体的な手続きに入っていきます。これらの機材がニジエールに到着するのは、早くも再来年ということですが、その先の目標である灌漑稲作振興、コメの自給率100%を目指して、日本とニジエール一丸となって今後も取り組んでいきたいと思っております(というわけで、早速 ONAHA にて5S-KAIZEN セミナーを実施しました！詳細は以下の記事をご参照ください)。



署名前、倉光大使、小畑支所長と笑顔で挨拶を交わす ONAHA 総裁（中央）



E/N の署名を終えた倉光大使と外務次官



E/N に続いて G/A の署名を終えた小畑支所長と外務次官

### 【5S-KAIZEN セミナーの実施@ONAHA】

というわけで、GA 署名から 20 日後の 10 月 24 日、ONAHA にて 5S-KAIZEN についてのセミナーを実施しました。その講師として抜擢されたのは、ニジェールにおけるミスター 5S-KAIZEN の異名を誇るドクター・イブラヒムです。イブラヒム氏が、初めて 5S-KAIZEN に出会ったのは今から 10 年前のスリランカで実施された JICA の研修でした。その理念やコンセプトにすっかり魅了されたイブラヒム氏は、ニジェールに帰国後、当時院長をしていた国立ラモルデ病院にて先陣を切って 5S-KAIZEN を実践し、病院のスタッフ全員を巻き込み、次々と改革を成し遂げていきました。その後も、保健省主催の 5S-KAIZEN 研修やニアメ国立病院における研修、さらにドゥッ州・ティラベリ州立病院での研修でも講師を務め、こうしてその名は全国に知れ渡るようになったのです。



5 S-KAIZEN について熱く語るイブラヒム氏。皆がその話しぶりに引き込まれていました。

そのイブラヒム氏、セミナーの開始時間の 9 時ギリギリに到着した我々よりも早く会場入りし、余裕の表情で我々を迎えてくれました。始まる前から貫禄十分です。

さて、セミナーの開始にあたり ONAHA 総裁のクーレ氏が、先に執り行われた E/N、G/A 署名について触れ、日本のこれまでの支援について改めて感謝の意を表しました。小畑支所長もそれに応える形で、今後のニジェールの食料安全保障における ONAHA の役割の重要性を、期待を込めて強調しました。その後、カメルーン事務所で作成された 5S-KAIZEN のプロモーションビデオが流され、軽快な音楽と共に繰り返されるメッセージをなぜか神妙に受け止められているあたり、実にニジェール人らしい反応だなぁ、と思ったりしていました。

続いてイブラヒム氏が 5S-KAIZEN とは何ぞや、という話を始めたわけですが、理念的な話だけではなく、ニジェールのコンテキストに合わせた分かりやすい事例を挙げて説明し、さらに自身が国立病院で実施した“KAIZEN”の数々を写真と共に紹介してくれました。質疑応答の後、早速皆で 2ヶ所あるアトリエを視察し、イブラヒム氏の診断を受けたのですが、素人目から見ても課題は山積。5S-KAIZEN 的な突っ込みどころ満載でした。今回のセミナーが、職場環境改善の一助となり、再来年到着するであろう多くの重機が気持ちよく受け入れられる場となるよう、少しずつ改善を進めていって欲しいと思います。



中庭に廃棄され、放置されたままの古い水揚げポンプ。ピフォアアフターのアフターに期待！



会議室に入りきらないほど ONAHA スタッフが集結してくれました（手前左が ONAHA 総裁、その向かいが小畑支所長）。



会議室の座学から現場検証へ。主に水揚げポンプを修理する工場は課題が山積していました。

（企画調査員 佐々木夕子）

9月号から始まった今コーナー、相変わらず原稿不足にあえいでおります...が、しかし！あの懐かしの駒ヶ根訓練所で国内協力員として活躍されている小川美沙隊員 OV(18-3)から素敵なお便りが届きました(感涙)。小川美沙さん、どうもありがとうございました！そして、引き続きニジェルに所縁の方々のお便りをお待ちしております(隊員 OV でなくても OK です！)。

㊚㊚㊚㊚㊚㊚㊚㊚ 世界をつなぐバレーボール ㊚㊚㊚㊚㊚㊚㊚㊚

みなさんこんにちは。平成 18 年度 3 次隊でドゴンドッチに体育隊員として派遣されていた小川美沙です！現在、私は駒ヶ根訓練所に勤務しており、多くの方に JICA 海外協力隊や、駒ヶ根訓練所を知ってもらうために、イベントや募集説明会などを実施しています。

実は私は、ニジェル派遣の後、ケニア・ルワンダに短期のバレーボール隊員として派遣されており、ルワンダでは、私の後任が 2019 年 9 月末まで活動をしていました。後任の一時帰国に合わせて(2018 年度末)、駒ヶ根近隣の高等学校に使用済みのボールの寄付を呼びかけたところ、ボール 150 球、ネット 15 張も集まったので、これまで私が関わったケニア、ニジェルにも寄付をしようと決めました。

輸送費は、駒ヶ根協力隊を育てる会に支援していただき、荷物の引き取りは、JICA ニジェル支所に協力していただきました。



協力隊時代の様子



無事にニジェルに届いたバレーボールたち(上)と引渡しに駆けつけてくれた INJS のムーサ氏(左)

寄贈したボールは、隊員時代にお世話になった INJS (ニアメ教員養成校) の Mr.MOUSSA が中心となり、これから教員となるニジェールの若者たちに、ニジェル国内でバレーボールが普及するために使用してもらいます。私は、これからもアフリカでバレーボールの普及活動をしていきたいと思っています。その根底には、初めて訪れたアフリカ大陸のニジェル共和国での数々の思い出があるからです。

ドゴンドッチに到着した時、子ども達に石を投げられ、心が折れた時、小学校の校長先生が子ども達に注意をしてくれました。実はみんな私に興味があったが、近寄る勇気がなかったということ先生から聞きました。多くの人とあいさつをして仲良くなろうと決め、道行く人に挨拶をはじめました。(2年後には、ドゴンドッチの人々全員が、私の名前を知っていました。)

また、風邪をひいた時には、カフェをしているガルディアンが栄養満点のサンドウィッチを作ってくれたり、揚げパンを作っているおばちゃんが『もっとたくさん食べなさい』とパンを家まで持ってきてくれたことが何よりもの薬となりました。配属先では全教師が『困ったことはないか？』と気にかけてくれ、活動のことだけでなく、生活のことすべてにおいて手助けしてくれました。当たり前のことなのかもしれませんが、ニジェルの人々から、“困っている人には手を差し伸べる”“温かな心を持つ”ということを学びました。

今私は、地域の学校で子どもたちに温かな心を持つニジェル人、ニジェルの人々の工夫する力は素晴らしいということを伝えています。ビニールと紐で作ったサッカーボールを紹介するとみんな驚いた表情になります。こうやって、ニジェルのことを駒ヶ根の人々に伝えることが今私のすべきことなんだろうと思っています。いつか自分のバレーボール指導技術が自分の納得いくレベルに到達したとき、ニジェルの子どもたちにバレーボールを教え、恩返ししたいと思っています。

## プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

### ■ ■ みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2 ■ ■ ■

『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ 2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及に取り組み、中等教育分野においては、アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会 (COGES)モデルの全国普及を進めています。

「初等教育分野」では、全国的な女子就学促進のため、みんなの学校「フォーラムアプローチ」による全国 8 州での「州教育フォーラム」開催を UNICEF と協働で支援することになりました。そこで、全国 8 州での開催を前に、全国 8 州の教育行政、地方行政関係者を一同に集め、女子就学問題への共通認識と戦略協議、特に全国 8 州でのフォーラムアプローチに基づく「州教育フォーラム」開催にかかる関係者決議を行うための、「州教育フォーラムキックオフセミナー」を開催しました。UNICEF が出資した今回のセミナー開会式には、ニアメ州知事、UNICEF ニジェール事務所長、JICA ニジェール支所長、UNICEF に出資するノルウェー大使が参列・挨拶を行った他、大統領夫人が開会宣言のスピーチを行い、当該問題にかかる政治的なコミットメントが明確に示されました。

開会セレモニー後の技術者会合においては、教育省からニジェールの全般的な就学・未就学状況、特にその中での女子就学状況、初等への入学状況や男女比率にかかる現状を共有し、問題へ行政とコミュニティが一丸となって取り組む必要性にかかる共通認識を醸成した上で、問題解決へ向けた戦略としてのフォーラムアプローチの有効性と手法を紹介し、当該活動への関係者コミットメントを促す協議を行いました。ニジェールにおいては、7～12 歳の初等就学児童数のうちの 4 割以上の児童、約 140 万名もの児童が未就学であり、特に、そのうちの 55%にあたる 78 万名が女子である状況です。その状況は小学校 1 年生への入学時点(7 歳)ですで見受けられ、7 歳女子の 50%が未就学であるという事実は、関係者に大きな衝撃を与え、その結果、地方行政、教育行政、そしてコミュニティへの働きかけを通して、地域関係者一丸となって、各州ともに当該問題に取り組むことが宣言されました。そして、最終的に、全国 8 州の地方行政(州知事代表)、教育行政(州教育事務所長、COGES 監督官)が、今回のキックオフセミナーの内容を州関係者と共有し、州ごとに女子就学促進へ向けた州教育フォーラムを開催、かつ、2019/2020 年度の新入生女子就学数を増加させることを決議し、各々が、それにかかり具体的にコミットメントすることを誓約しました。

今後は、全国 8 州それぞれにて、州内すべての関係者を動員し、具体的な現場での活動実現へと結び付けるため、全国 8 州において、次々に州教育フォーラムが開催されます。プロジェクトでは、有効なフォーラムアプローチの導入が図られるよう、各州それぞれへの支援に取り組んでいきます。



開会セレモニーにてパフォーマンスを行った女子児童たちと大統領夫人、他。



女子就学促進へ向けたコミットメントを宣言する大統領夫人

(EPT 専門家 影山晃子)



支所便り7月号(2016)から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第23話。今回は、嫁入り道具のひとつでもある食器について執筆頂きました。

ニジェールの農村に滞在し、現地調査を続けていると、家の中にまでお呼ばれする機会があります。床は砂で、出入り口のドアもしっかり閉まらず、ホコリっぽい家のなかには、家財道具はけっして多くはないのですが、どの家にもかならず、きれいな食器が並べてあります。苦しい生活をつづける家でも、雨漏りがする家でも、未使用の食器は驚くほど、きれいです。粗末な家のなかに、きれいな食器がそろっているのに不自然さを感じざるを得ません。食器—とくにお皿はハウサ語で、クアノ (*kuwano*) と呼ばれます。わたしは親しい友人に対し、「この、きれいなクアノを売れば、食料を買えるのではないか」と冗談っぽく聞いたことがあります。その不躰な質問に、その友人は答えました、「妻の所有物だから、わたしには勝手に売却する権限はありません」。

新婚女性の家には、たくさんの新しい皿がそろえられています。今年2月に結婚したばかりのバシラに家のなかを見せてもらいました。バシラは17才、夫のシェピウは20才です。シェピウは、わたしの友人である村長、サイドウの息子です。この新しい食器は、バシラの嫁入り道具です。ハウサ社会では、この嫁入り道具については、新郎側が新婦側に支払った婚資の一部を使って、新婦の母親が準備することになっています。

シェピウの母親、つまり、バシラの姑にあたるベイワが以下のように説明してくれました。シェピウの結婚には30万フラン(6万円)の婚資の支払いが必要だったと言います。ベイワが婚資を捻出するために雄ウシと雄ヒツジを1頭ずつ売却し、夫のサイドウが息子夫婦のために家を敷地内に新築し、結婚式の参列者に配るコーラナツツ3500フラン(700円)分を購入しました。新婦の両親は受け取った婚資を元手にし、家具やベッド、マットレス、毛布、床にひくプラスチック・シート、壁に垂らす布、食器などを嫁入り道具として準備し、新居に持って来たと言います。

バシラに現在、日常生活で使用している食器などを並べてもらいました。食器はハウサ語でクワノと総称されますが、クワノにはたくさんの種類があります。クワノというのは厳密にはトウジンビエやトウモロコシなどを計量するティヤという単位になる深皿を指します。そのほかにサミラ(*samira*)、チャナ(*chana*)、ファンテーカー(*fanteka*)、シルバ(*siruba*)、家財道具としてはガラス・コップのベル(*verre*)、やかんのブタ(*buta*)、花瓶のピラー(*pillar*)、プラスチック容器のローバ(*roba*)、トウジンビエ粉をふるう篩 (*matankadi*)、女性が調理どきに座る椅子(*kujera mata*)などもあります。わたしの調査アシスタントのアスマナはこれらの名称をすばやく言えず、ベイワは「男性たちは調理道具のことをまったく知らない」と笑いました。



家の一番奥、大きな皿の上に小さな皿が積み上げられています。



農村の家いえには、新しい皿が大切に保管されています。この皿は、すべて女性たちの所有物です。





17 歳の新婚バシラと嫁入り道具の食器



家庭で使われている食器の一式。



大小2種類のクワノ(kuwano)。水をすくったり、トウジンビエやコメ、ササゲなど農産物をすくうのに使われます。大きい方はティヤ(tiya)という農産物を計量する単位となり、小さい方の皿はティヤの半分だと表現されます。大きいクワノの価格は 1250 フラン、小さい方は 1000 フラン。



シルバ(siruba)。家人用にも、おもにスープを入れるのに使われます。銀色をしていることが名前の由来だと思われませんが、詳細は不明です。価格は 1 枚、750 フラン。



チャナ(chana)。副食のスープや牛乳、ゆでたササゲなどを入れ、自家用の簡易的な食器として使われます。写真の花柄は定番です。



ファンテーカ(fanteka)。脱穀したトウジンビエ、さやから取り出した未調理のササゲやラッカセイなどが入れられます。また、トウジンビエの粉や、トウジンビエの製粉途上で出てくる「ぬか」なども保管されます。大勢で食事をとるとき、スープをかけた主食が入れられることもあります。大容量が特徴で、輸送用にも使われます。大きい皿の価格は 1250 フラン、中は 1000 フラン、小は 750 フラン。



サミラ(samira)。主食や副食などを入れます。取っ手がついており、少人数の来客用やおすそ分け用に使われます。大・中・小の 3 枚がセットで、価格は 2000 フラン。ホコリが入らないよう、ふたは必須です。

ベイワと話をして、はじめて分かったことがあります。それは、母親としての務めは、娘を嫁がせたあとも続くということです。娘の嫁ぎ先が裕福であれば、その娘は母親を経済的に支援してくれますが、娘の嫁ぎ先が困窮していれば、母親は娘の生活を支援しつづけます。手元にある調理器具がつぶれると、裕福な家のばあい、夫が妻に現金を渡し、妻が食器を買うこともあります。ふつうは女性が嫁入り道具の食器を使い、それがなくなると女性が自らの現金で購入するか、あるいは、女性の母親が皿を購入し、支援するものとされています。夫みずからが市場へ行って、妻のために皿を買うことはありません。



家の内部をみせてくれた姑のベイワ。

女性は妊娠中には十分に農作業などはできないし、家事や育児に追われることが多く、手持ちの現金は不足しがちです。母親は、娘の求めに応じて手元の現金で皿を買い、娘に与えることもありますし、あるいは、あらかじめ娘用の食器を準備しておくこともあるそうです。

つまり、わたしが投げかけた質問、「家のなかの家財道具—とくに嫁入り道具を売って、食料を購入する」というのは、かなりの窮状です。農村で、このようなことはごく稀に起きるそうですが、夫婦、そして夫側と妻側、双方の親族が困窮している場合の最終段階だということになります。妻が嫁入り道具を売却するには、独断で事を進めることはできません。まず、婚資を支払った夫と夫の両親の承諾を得る必要があります。妻が嫁入り道具を売らなければ生活できないという窮状は、夫と夫側の両親にとっては屈辱的なことです。そして、そんな屈辱的なおこないは、子供を産んだ女性にのみ許されるものだという事、村の男性たちは強調しました。この言葉は、農村において子供を持たない女性の立場が結婚生活のなかで、きわめて弱いことを意味しています。

ベイワに対して、「いつになったら、息子や娘を支援する母親の務めが終わるのか」と聞いてみました。それは、子供たちがすべて結婚し、息子も、娘も子供をもうけたときだと答えました。ベイワは現在 60 才、17 歳のときに結婚しました。産んだ 3 人の娘はすべて結婚し、それぞれ 6 人、4 人、1 人の子供をもうけています。末っ子の息子シェピウも結婚し、新婦のバシラが婚入し、ふたりは同じ敷地に同居しています。

ベイワはみずからの家のなかへわたしを招き入れ、「新婚夫婦の家とちがい、わたしの家のなかには家財道具がないでしょう。でも、わたしが嫁入りしたときに、母がそろえてくれた嫁入り道具が、いまでも 3 つ残っています」と教えてくれました。ベイワが結婚したのは、1970 年代初めにサヘルを襲った大干ばつの直後です。



部屋のすみに置かれた素焼き

この大干ばつには、カンチカラゲ(*kanchikarage*)という名前がついています。「そんな困窮したなか、夫の父親—アンディは婚資を準備し、受け取った婚資を元手にわたしの両親が嫁入り道具を買いそろえてくれました。夫の両親も、わたしの両親も、すでに亡くなっています。」とベイワは感謝の気持ちを表現しました。その 3 つとは、使い古した大きな皿—ファンテーカと道具箱、そして、今でも使われつづけ、水の入っている素焼きのつぼでした。ベイワは、3 つの古びた家財道具を見せたあと、「わたしの母親としての務めは終わりに近づいてきました」とつぶやきました。

ニジェールの自然増加率は世界一位の高さで、子だくさんの国です。しかし、人びとはけっして多くの子供を産んで、養育もせず、無責任に放ったらかしている訳ではありません。一見すると、ごくふつうの食器やつぼなどの家財道具に対して、みずからの結婚や出産、育児、両親からの支援、そして娘や息子たちの結婚、子供たちへの支援という苦楽をともなう人生のなかで意味づけをし、両親に対する深い感謝の気持ちが込められているとは思いませんでした。

息子や娘の暮らしぶりから判断すると、ベイワの母親としての務めは当分、終わりそうにないのかもしれませんが。女性たちが家財道具を入手した由来を語る口ぶりから、厳しい自然、社会、経済状況のなかでも、子供たちの幸せな生活を願い、ときに自己犠牲をともなうかたちで、親として子供を懸命に支援し続けようとする人々の人生に対する前向きな姿勢を感じるのです。

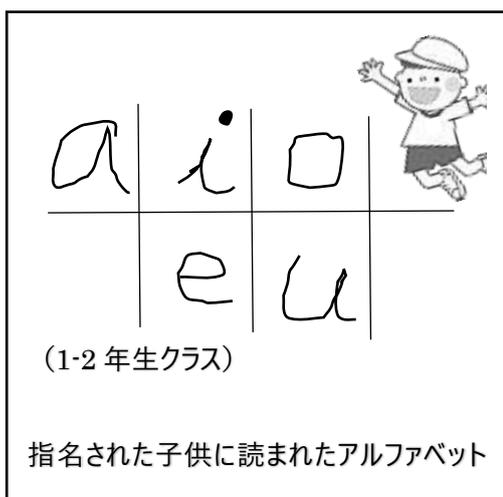
農村の家には、それこそ数えきれないほど訪問し、綺麗に積み重ねられた食器を何度も目にしてきましたが、その食器について質問したことはありませんでした。確かに、その日食べるものすら困っているような家庭においても、その綺麗な食器たちは家の奥の方に大事そうに「飾られて」いました。普段使われている食器類は、すっかり使い古されて、表の柄が剥げてしまっていたり、変形したりしているのに、不思議とその綺麗な食器たちが使われることはありませんでした。この食器たちに込められた親や娘の思いを今回初めて知り、すっと腑に落ちた気がします。

大山先生が最後に触れられているように、ニジェールは世界の最貧国に位置づけられ、一人の女性が産む子どもの数も世界一です。これだけ聞くと、『貧しいのになぜ子どもをたくさんつくるのだろう？』と短絡的に考えてしまいがちですが、その数字やデータに現れない、こうした背景を決して軽視してはならないと思います（Y.S）。



## 巻末連載企画！ <sup>むす</sup>ODのいちおし

先日、みんなの学校プロジェクトがパイロット校として選定したニアメ市郊外の小学校でのフランス語と算数の補習授業の見学をしました。授業の形態は、私が普段アフリカで見かける先生たちも子供たちも黒板やノートに書くだけの授業ではなく、一人一人の生徒が生き生きと先生の問いかけに対して答えたり、身近な教材を使って先生たちが提案する実習に各自が参加したりする授業でした。実習では、小石やストローで数の概念を伝えたり、地面に線を引いて指示された母音の場所に移動したり、ゲーム感覚で参加できる授業が取り入れられています。



先生の問いかけが優しく穏やかで、楽しそうに授業が行われ、おしゃべりをする子もなく、全員の目が生き生きとしていたのが印象的でした。これもプロジェクトの一環として教材の利用方法と教授法の指導を受けた教員の努力の賜物と言えらると思います。

また、先生の近くで一生懸命授業に参加しているのは、どのクラスも女子が多いと感じました。それなのにニジェール全体での女子就学率はいまだ他国に比べて低い状況です。彼女たちの未来の選択肢を広げるためにも、女子就学の必要性と可能性について考えさせられた一日でした。今後、ユニセフと連携して女子就学率向上を含めた活動を展開する、みんなの学校プロジェクトに期待大です！



ストローを使って二けたの足し算。10本を束にした十の位と、一本ずつ数える一の位でくらの概念を勉強



一人ずつザルマ語で思い思いのお話をします。黄色いTシャツの子が猿とウサギが出てくる昔話を紹介しています。お話が終わると、全員で拍手👏  
(写真右)

(企画調査員 大出理恵)